

[農 作 概 況]

[水 稻]

1. 作 付 の 概 況

九州地域の作付面積は 375,400haで前年の作付面

積より45,100ha減少した。これは米生産調整が実施されたために休耕田、転作田などの増加によるものである。各県とも前年より10%以上減少し、低収地帯の宮崎県・鹿児島県が他の県より減少率が大きい。

昭 和 4 5 年 産 水 稻 の 取 穫 量 と 被 害 量

県 名	作付面積	取 穫 量					う ち 早 期 栽 培			
		10アール 当り収量	取 穫 量	前年取穫量 との差	10アール当 り平年収量	作 況 指 数	作付面積	10アール 当り収量	取 穫 量	作 況 指 数
	ha	kg	t	t	kg	%	ha	kg	t	%
全 国	2,836,000	442	12,528,000	▲1,269,000	431	103	—	—	—	—
九 州	375,400	405	1,519,000	▲ 352,000	430	94	34,900	—	124,700	—
福 岡	81,600	431	351,700	▲ 96,200	480	90	39	382	149	—
佐 賀	48,600	461	224,000	▲ 53,600	510	90	2,300	349	8,200	—
長 崎	29,000	355	103,000	▲ 20,900	372	95	3,180	301	9,570	—
熊 本	71,700	418	299,700	▲ 75,000	461	91	3,960	331	13,100	96
大 分	47,600	387	184,200	▲ 46,000	404	96	155	299	463	—
宮 崎	41,900	371	155,400	▲ 32,000	374	99	13,600	384	52,200	102
鹿 児 島	55,000	365	200,800	▲ 28,600	360	101	11,700	350	41,000	108

県 名	総 被 害		気 象 被 害		病 害		虫 害	
	被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量
	ha	t	ha	t	ha	t	ha	t
全 国	4,505,000	1,127,000	1,173,000	369,900	2,265,000	536,600	1,023,000	203,700
九 州	1,257,000	273,600	439,600	98,100	551,100	121,800	260,300	52,300
福 岡	338,900	69,200	137,300	26,600	128,300	26,600	72,200	15,800
佐 賀	191,000	43,900	80,600	17,700	77,100	18,400	33,300	7,790
長 崎	60,300	19,300	20,000	6,240	22,600	6,400	17,700	6,550
熊 本	222,100	53,200	96,500	22,700	89,400	23,200	35,700	7,150
大 分	133,800	28,700	48,700	9,900	69,300	16,400	15,400	2,180
宮 崎	121,000	28,700	23,600	9,570	70,900	14,700	26,200	4,310
鹿 児 島	189,600	30,600	32,900	5,360	93,500	16,100	59,800	8,550

注) 1. 被害面積は延面積である。 2. ▲印は減を示す。 3. 資料：農林水産統計速報 45-294 (作統-53)

2. 作 柄 の 概 要

(1) 普通水稻

6月下旬から7月中旬の低温と日照不足のため、初期成育は抑制され、やや軟弱の成育で分けつの発生も少ない。梅雨明け後の7月下旬から8月上旬は高温、多照に経過したため、健全な成育であった。穂数は平年にくらべると、福岡、佐賀がやや少なく、長崎、熊本、鹿児島はやや多く、大分、宮崎は多い。福岡、佐賀は分けつ初期、中期の低温・少照が影響して減少したが、熊本は㎡当り株数増加、大分、宮崎、鹿児島は株数増加のほか穂数型品種の普及によって多くなった。

8月14日～15日の台風9号で北部九州の各県は葉の裂傷をこうむり、また台風通過後低温と曇雨天がつづき、日照不足のため、平均1穂のみみ数は九州

各県とも減少した。出穂期は、9月上旬の高温、多照のため平年より1日～3日早い。

出穂期から登熟初期は高温、多照のため穂揃いもよく、初期登熟は促進し良好であったが、9月中旬から10月中旬までは日照時間が少なく、高夜温に経過したため、同化機能が低下し、そのうえ病虫害の多発により登熟は不良である。とくに福岡、佐賀、熊本は登熟障害が大きく、作柄は不良で、長崎・大分の作柄はやや不良であった。南九州の宮崎・鹿児島は、穂数型品種の普及により穂数の増加と、平年に比較して被害が少なかったため平年並の作柄である。

(2) 早期水稻

栄養成長期間は全般に低温・少照に経過したため成育は不良で、分けつ数、穂数とも少なかった。こ

の反面平均1穂のもみ数は多い。登熟期間は、高温、多照で気温較差も大きく、登熟はきわめて良好で病虫害の被害も少なかった。収穫期に台風9号が来襲したが、南九州は大部分が収穫済みであったため被害が少なく作柄は良好であった。北九州は台風被害が多く作柄は不良で、とくに熊本県天草地域は、倒伏、穂発芽により品質が低下した。

3. 被害の概要

九州全体の被害量は 273,600t、被害率16.8%で平年より 3.7%多い。種類別の被害率を平年にくらべると病害が 3.3%、虫害が 0.8%それぞれ多く、気象被害は 0.4%少ない。

県別では、総数の被害率を平年にくらべると、福岡、佐賀は9%、熊本は5%、大分は4%それぞれ多い。しかし鹿児島は8%、長崎、宮崎は1%平年より低く、北九州各県の被害が大きかった。

被害の特徴としては、登熟障害(被害率 3.2%)、いもち病(被害率 3.7%)が平年より多かったことである。(九州農業試験場)

[麦 類]

1. 作付の概況

麦類の作付面積は依然として減少傾向が続き、本年九州の4麦合計作付面積は 141,900haで、前年より25,100ha(15%)も減少した。麦別にみると2条大麦が前年より2%増加したほかは、小麦14%、6条大麦が48%、裸麦が28%それぞれ前年より減少した。これらの減少は、その大半が不作付の増加となっている。他の作物への転換では、果樹、野菜および飼料作物などである。

2. 作柄概況

昭和45年産 麦類の収穫量と被害量

県名	小 麦					6 条 大 麦					2 条 大 麦				
	作付面積	10アール当り収量	収穫量	前年収穫量との差	作況指数	作付面積	10アール当り収量	収穫量	前年収穫量との差	作況指数	作付面積	10アール当り収量	収穫量	前年収穫量との差	作況指数
	ha	kg	t	t	%	ha	kg	t	t	%	ha	kg	t	t	%
全国	229,200	207	473,600	▲284,300	75	46,300	320	148,100	▲71,400	95	99,300	271	269,400	▲49,000	88
九州	86,700	134	115,800	▲98,000	56	155	132	204	▲504	59	25,500	242	61,600	4,700	98
福岡	25,200	100	25,200	▲39,400	37	0	—	0	▲5	—	1,730	235	4,070	40	87
佐賀	9,950	179	17,800	▲9,000	66	0	—	0	—	—	7,280	251	18,300	2,700	90
長崎	7,210	192	13,800	▲4,200	76	15	155	23	▲18	82	369	245	904	64	94
熊本	19,200	137	26,300	▲16,900	65	7	143	10	▲40	—	3,960	227	8,990	▲410	95
大分	11,300	49	5,540	▲25,960	18	104	104	108	▲460	43	765	165	1,260	80	57
宮崎	5,470	212	11,600	▲1,400	113	18	228	41	▲2	109	2,510	271	6,800	1,590	109
鹿児島	8,280	188	15,600	▲1,100	108	11	200	22	22	146	8,850	241	21,300	700	111

県名	裸 麦					4 麦 合 計		
	作付面積	10アール当り収量	収穫量	前年収穫量との差	作況指数	作付面積	収穫量	前年収穫量との差
	ha	kg	t	t	%	ha	t	t
全国	80,200	193	155,000	▲119,200	72	455,000	1,046,000	▲524,000
九州	29,600	181	53,600	▲28,200	74	141,900	231,200	▲122,000
福岡	1,070	145	1,550	▲1,870	60	28,000	28,800	▲43,000
佐賀	811	211	1,710	▲1,020	75	18,000	37,800	▲7,300
長崎	7,720	229	17,700	▲1,200	86	15,300	32,400	▲5,400
熊本	5,470	207	11,300	▲3,700	95	28,600	46,600	▲21,100
大分	7,380	97	7,160	▲16,140	34	19,500	14,100	▲42,400
宮崎	3,190	210	6,700	▲2,430	104	11,200	25,100	▲2,300
鹿児島	3,910	190	7,430	▲1,880	106	21,100	44,400	▲2,200

県名	4 麦 合 計							
	総被害		気象被害		病害		虫害	
	被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量
	ha	t	ha	t	ha	t	ha	t
全国	673,100	430,800	384,300	313,600	267,600	113,000	15,200	2,390
九州	256,000	160,700	123,200	101,600	128,700	56,500	2,870	1,260
福岡	56,700	54,100	27,800	36,700	28,100	16,700	371	404
佐賀	40,400	18,500	21,200	10,500	17,400	7,210	1,720	757
長崎	25,000	12,000	10,200	6,500	14,600	5,540	59	12
熊本	51,800	25,500	26,100	16,700	25,600	7,720	85	32
大分	44,200	43,000	26,100	27,200	17,800	15,800	315	30
宮崎	13,200	3,200	4,970	2,180	8,140	1,010	76	8
鹿児島	24,700	4,410	6,850	1,800	17,100	2,540	246	13

注) 1. 被害面積は延面積である。 2. ▲印は減を示す。
3. 資料：地方農政局統計調査事務所長報告書による。

は種期は、福岡・佐賀・長崎・鹿児島の各県は平年より2日～7日早く、その他の県はほぼ平年並である。は種後の気象は、2月上旬まで長期間、低温・少雨・多照に経過したため草丈の伸長および莖数の増加を著しく抑制した。しかし日照時間は多く、圃場はやや乾燥気味に経過したため根の成育伸長は良好であった。2月中・下旬は高温で降水量もあり成育は一時旺盛となったが、3月は再び例年にない低温が続いたため、節間伸長は著しく遅延した。なお、成育初期の低温は分けつのは発生を遅くしたが、分けつ期間が例年より約1カ月も長くなったため、全莖数は各県とも平年より多くなり、その影響から穂数も増加した。

出穂期は、前期成育期間の全般的な低温による成育遅延、とくに3月の低温が大きく影響して各県とも平年より4日～8日遅れた。このおくれは、成熟期のおくれにつながり、本年の異常気象にもとづく被害発生に大きく影響した。

1穂の稔実粒数は平年に対して鹿児島がやや多く大分はやや少ない。その他の県は平年並で穂数が多いことから、登熟前半までは各県とも平年並以上の作柄が予想された。とくに熊本・大分・宮崎・鹿児島の各県は110%以上の作柄が予想されていた。しかしその後の登熟はきわめて不良となった。すなわち、4・5月の長雨は倒伏・湿害・赤かび病の発生となり、稔実小穂数歩合、上麦粒数歩合および千粒重の低下と品質の低下をきたした。とくに福岡・佐賀・長崎・熊本・大分など北部および中部九州の小

麦は成熟期が平年より7日～9日遅延し6月10日前後となったため、本年の梅雨入り（6月10日）の影響から収穫作業は困難をきわめ、立毛中に湿害（枯れうれ）・倒伏・赤かび病・穂発芽が発生した。また刈倒したまま収納できず穂発芽・変色腐敗なども発生して品質は著しく低下した。

また圃場に放棄されたものも少なくなかった。

3. 被害状況

小麦：九州全体の延べ被害面積は172,700haで、被害面積率でみると199%である。被害量は122,200t、被害率59%で昭和38年につぐ凶作年となった。被害種類別の被害率は、気象被害が39%、病害は19%（このうち赤かび病による被害が18%）である。虫害は僅か0.1%で気象被害が最も多い。県別では大分・福岡が被害甚大で、つぎに熊本・佐賀・長崎の順に大きく、宮崎・鹿児島は比較的少なかった。これらの被害はほとんどが4月以降の長雨に原因する白渋病・赤かび病・湿害（枯れうれ）・倒伏・変色腐敗によるものが最も大きい。また成熟期のおそい福岡・佐賀・大分は刈捨て・焼却・圃場放棄など収穫放棄した面積が6,000haに達した。

2条大麦・裸麦：被害率で2条大麦は17%、裸麦は37%で小麦の59%に比較すれば、収穫が入梅前の6月上旬の一時好天時期であったためやや少ない。この被害は小麦同様に、4月以降の長雨による被害で両麦とも赤かび病・変色腐敗・湿害があげられるほか、2条大麦は倒伏による被害が比較的が多かった。（九州農業試験場）

〔かんしょ〕

1. 作付概況

九州の作付面積は8万haで、全国の63%を占めているが、面積は減少傾向をつづけ、前年に比べ13,800ha(18%)の減となった。とくに、長崎県(主として島岐部)での減少が目立っている。

昭和45年産 かんしょの作付面積と収穫量

県別	作付面積	10アール 当り収量	収穫量	作況 指数	作付面積		収穫量	
					前年対差	前年対比	前年対差	前年対比
全 国	128,700	1,990	2,564,000	100	▲24,900	83	▲291,000	90
九 州	80,710	2,107	1,700,400		▲13,778	82	▲72,400	95
福 岡	935	1,510	14,100	98	▲195	81	▲2,100	87
佐 賀	665	1,890	12,600	99	▲283	70	6,500	66
長 崎	10,100	1,870	188,900	99	▲3,500	74	▲31,400	86
熊 本	6,660	2,000	133,200	104	▲1,370	83	3,900	103
大 分	1,650	1,720	28,400	103	▲230	88	▲900	97
宮 崎	13,000	2,140	278,200	98	▲2,800	82	▲50,400	85
鹿児島	47,700	2,190	1,045,000	101	▲5,400	90	15,000	101

注) 1. ▲印は減少をしめす。

2. 作柄概況

6月中旬より、7月中旬の低温、日照のため、初期生育は悪かったが、梅雨あけ後、高温・多照となり生育は回復した。その後もおおむね高温、適湿で、いもの肥大も順調にすすみ、作柄は平年並みないしやや良であった。九州全体については、作付面積の前年比18%減に対し、収穫量は5%減の170万トンであった。

〔春植ばれいしょ〕

1. 作付概況

九州の作付面積は12,700haで、全国の8%を占めるにすぎない。また、九州での主産地長崎県では増加したが、他の県では、いずれも減少し、全体では550ha(4%)の減少となった。

昭和45年産 春植ばれいしょの作付面積と収穫量

県別	作付面積	10アール 当り収量	収穫量	作況 指数	作付面積		収穫量	
					前年対差	前年対比	前年対差	前年対比
全 国	150,600	2,220	3,345,000	117	▲16,800	90	▲59,000	99
九 州	12,676	1,449	183,690		▲548	96	▲23,510	87
福 岡	1,800	1,200	21,600	75	▲60	97	▲9,100	70
佐 賀	705	1,530	10,800	94	▲47	94	▲1,500	88
長 崎	4,350	1,560	67,900	89	340	108	100	100
熊 本	1,520	1,560	23,700	99	▲130	92	▲2,700	90
大 分	770	1,220	9,390	88	▲75	91	▲3,410	73
宮 崎	871	1,440	12,500	100	▲56	81	▲1,500	89
鹿児島	2,660	1,420	37,800	98	▲520	84	▲5,400	88

注) 1. ▲印は減少をしめす。

2. 作柄概況

植付期から低温・日照のため、生育は平年に比べ遅れ気味であった。その後、6月下旬以降の長雨のため、生育は抑制され、いもの数は少なく肥大も悪く、腐敗・疫病等の発生も多く、作柄はやや不良ないし不良であった。

〔なたね〕

1. 作付概況

九州での作付は12,225haで、全国の64%をしめ、なかでも鹿児島県は、その70%をしめている。しかし、前年からの減少割合は全国の35%に比べて、30%と低いが、相変わらず減少が続いている。

昭和45年産 なたねの作付面積と収穫量

県別	作付面積	同前年 対比	10アール 当り収量	収穫量	前年収穫 量との差	作付 指数
全 国	19,200	65	157	30,100	▲17,900	105
九 州	12,225	71	143	17,479	▲7,577	
福 岡	831	54	98	814	▲1,216	75
佐 賀	546	62	120	655	▲395	94
長 崎	669	77	121	809	▲311	94
熊 本	635	52	115	730	▲700	95
大 分	316	56	89	281	▲455	70
宮 崎	698	71	156	1,090	▲400	121
鹿児島	8,530	76	153	13,100	▲4,100	111

注) 1. ▲印は減少をしめす。

2. 作柄概況

は播は好天に恵まれ、順調であった。生育は全般

に低温と乾燥気味のため、やや抑制され開花期も3～7日遅れた。しかし主産地の鹿児島、宮崎両県では、5月中旬以降の好気象により、登熟は順調で、作柄は良好であった。北九州地方は、登熟期の長雨のため、発芽、腐敗が多く、作柄は不良ないしやや不良であった。

[だ い ず]

1. 作 付 概 況

九州におけるだいずの作付面積は、夏・秋だいず合わせて8,400haで、全国の9%弱にすぎない。前年に比べて、米の生産調整による転作から減少傾向は鈍化し、福岡、佐賀では微増したが、九州での80%を占める、他の県で減少を続け、結局、全体として70%の減少となった。

昭和45年産 だいずの作付面積と収穫量

県 別	作付面積	同前年 対 比	10アール 当り収量	収 穫 量	前年収穫 量との差	作況 指数
	ha	%	kg	t	t	%
全 国	95,500	93	132	126,000	▲ 9,700	100
九 州	8,398	94	113	9,473	▲ 164	
福 岡	927	109	122	1,130	40	98
佐 賀	762	113	118	899	40	103
長 崎	1,190	88	95	1,130	▲ 230	101
熊 本	2,310	90	119	2,750	220	99
大 分	1,490	98	116	1,730	▲ 30	102
宮 崎	809	101	112	906	▲ 42	96
鹿児島	910	77	102	928	▲ 162	102

注) ▲印は減少をしめす。

2. 作 柄 概 況

夏だいずは生育初中期は、低温・日照で、生育は良くなかったが、登熟期は比較的好気象に恵まれ、平年作近くまで回復した。

秋だいずは、播種後から比較的好調に経過し、おおむね平年作であった。

(九州農業試験場)

[花 き]

1～5月は比較的好調で特記すべきことは少なかった。

6月～7月上旬にわたって連日降雨があり、水稻転作のツツジ、サツキをはじめ各種の苗木類に湿害があり、とくにサンショ苗は枯死するものも生じた。露地ギクにも湿害によって併発した立枯性病害や薬剤散布が充分にできなかったために斑点性病害が発生した。

7月下旬～8月上旬の高温のためシクラメンの花芽が越冬できないものがあり、年内出しができなかったものも少なくなかった。

8月14・5日の台風によってカイヅカイブキ、ヒマラヤスギの苗木、庭木類の倒伏が多く、メタセコオイア、ナンキンハゼの幹折れ、枝折れが多く、場所によってはクスノキの大枝まで折れる場合もあった。

11月の晴天、高温により電照ギクの開花が進み、12月上中旬に収穫が多く、12月下旬には品不足となった。

[そ 菜]

1月中旬の異常低温により一部の無加温ハウスそ菜は被害を受けたが、加えて乾燥続きのため露地越冬そ菜ではタマネギの初期生育が遅れ球肥大期の天候回復にもかかわらず小玉となって減収した。カンラン、ニンジン、パレイショなど春どりそ菜の収穫は遅れた。

3～4月の気象は早春期やや低温気味のほかおおむね好調であったため、ハウス栽培のトマト、キュウリ、イチゴの作柄は良く、春まき露地そ菜の生育もおおむね良好であった。しかし、6月は長雨に加えて気温があがらず、水田前作の採種栽培は登熟期に打撃を受け、春夏作果菜の栽培はべと病、えき病の被害が大きかった。

8月中旬の台風は平たん部の夏キュウリ、ハウス夏秋作メロンおよび高原そ菜に影響した(たとえば熊本県下夏キュウリの被害率は30%)がそ菜全般からみると端境期のために被害は大きくなかった。8月下旬の台風は鹿児島県下の一部に軽度の被害をもたらした。

9月に入って不連続に経過した長雨は秋そ菜のは

種を遅らせ、苗床では生育の遅れと病害多発の原因となり、あるいはハクサイ、カンランの定植を遅らせて秋そ菜は全国的に不作となった。

10月以降のそ菜生産は再び南九州地方の抑制果菜が重要となり、露地抑制栽培のキュウリ、カボチャは9月の降雨で収量が低下したがその後の気象好転でもちなおし、またハウス抑制果菜の生産は安定した。なかんずく11～12月期は日照も多く気温も高目に経過したので、北部九州のハウスそ菜は良好な生育を続けている。

〔 果 樹 〕

常 緑 果 樹

国は各種の資金を、低利でしかも長年月貸与して各種果樹の増殖を計ったが、中でもミカンは物凄い増加を示し、その結果九州におけるミカンの栽培面積は全国面積の43%をしめるに至った。しかしこのごろではこれらの増加は最近におけるミカンの需給関係が反映して、やや伸びなやみの傾向がでてきた。

したがって今後のミカン栽培は、その規模を拡大するとともにSSを初めいろいろな機械を使ってできるだけ省力栽培ができるように基盤整備をしてコストダウンをしないと経営的になかなかむずかしいとみなければならぬ。

しかも今後はきびしい産地間の品質競争が問題となるであろう。

さて今年度のミカンの生育概況であるが、ほかの果樹と同様、生育が約10～15日ぐらい遅れた。この傾向がずっと尾を引いて着色も10日以上遅れた。その後11月下旬の冷えこみなどでいくらか着色が進んだが大勢はやはり相当の遅れを見た。11月下旬、雪をかぶって腐敗の原因となったものが多い。

多収とみられていたミカンの収量は採取してみると案外少なかったようである。原因については明らかでない。一般に強せん定が多かったこともその一つであろう。

落 葉 果 樹

落葉果樹でもカキ、ナシ、ブドウ、モモなどの果

樹が萌芽から遅れ、その後もこの傾向が続いた。

6月は連日の雨で各種果樹の病気が続発した。次にブドウの赤うれがひどかった。この現象は近年急激に増えたようで、その原因ならびに防除の確立が望ましい。

8月14～15日に台風19号が来襲、九州西北部が激しい被害をうけ、収穫前の落葉果樹ナシ、ブドウ、カキ、モモ、クリなど大部分の果樹に激甚な被害があった。なかでも施設（タナ）を倒され途方にくれた者が多い。また、ブドウ、ナシ、クリなどは収穫直前の大被害で、生産者には大きい打撃であった。

（園芸試験場久留米支場）

〔 茶 〕

一 番 茶

2月～3月の干ばつ、低温、晩霜などの異状気象にたたられ、全般的に発芽期が2～3日、摘採期は3～7日おくれた。生産量は九州全般では10～15%程度の減収であるが、福岡では4月30日の晩霜により大きな被霜をうけて7%以上減収のところがあつた。熊本県北部地帯にも同日の霜害がみられた。従って今年の一発茶の作柄は全般に良くなく、発芽期のおくれ、低温による茶芽の伸育不良、芽の不揃い、葉肉のうすさが目立ち、摘採期もおくれたことが特徴的であつた。病虫害は、全般にカンザワハダニの多発が目立ち、宮崎ではコミカンアブラムシ、長崎でコカクモンハマキ、チャノホソガの多発が見られた。

二 番 茶

降雨と低温のため、伸育悪かつた。全般に芽数少なく、葉肉もうすく、熊本、佐賀、福岡などで10～25%程度の減収であつた。しかし鹿児島では摘採は4～5日おくれたが収量は平年並かや、減収程度であり、宮崎では芽数の増加で15%程度の増収であつた。

病虫害では、宮崎にコカクモンハマキ、カンザワハダニ、佐賀と福岡でヒメミドリヨコバイの多発が見られ被害をうけた。

三 番 茶

7月中旬以後の気象は平年並みのところが多く、茶芽の生育も一応平年並となった。鹿児島では摘採が、3～5日早目で、収量は平年の50%増であったが、宮崎、佐賀でもそれぞれ35%、15～30%の増収となった。しかし熊本では28%程度の減収、福岡は平年並みかや、減収となった。これらは寡照その他で伸育不良、芽数が少なかったことによる。

病虫害では、熊本でハマキムシ多発、佐賀では、コカクモンハマキが異常多発した。

九州における著名な茶産地の摘採期および10a
当り収量

地名	年度	一 番 茶		二 番 茶		三 番 茶	
		摘採期	収 量	摘採期	収 量	摘採期	収 量
知覧	昭45	月 日	kg	月 日	kg	月 日	kg
	44	5. 4	675	6. 18	535	7. 29	565
川南	45	5. 8	612	6. 22	733	7. 28	664
	44	5. 6	648	6. 21	525	7. 31	597
熊本	45	5. 11	579	6. 26	613	7. 30	338
	44	5. 7	854	6. 23	524	8. 6	546
嬉野	45	5. 9	488	7. 3	403	8. 11	550
	44	5. 7	707	7. 5	632	8. 19	396
八女	45	—	—	6. 16	401	7. 28	457
	44	5. 7	628	6. 26	549	8. 7	460

注：八女、45年、一番茶霜害のため実収報告なし。
(茶業試験場枕崎支場)

〔 畜 産 〕

酪 農

九州の乳用牛頭数は36年以降増加し、45年には16万頭となり全国の9%のシェアを占めている。1戸当りの飼養頭数は、飼養戸数の減少に伴い44年度の4.8頭から5.5頭と増加しているが、とりわけ北九州では8.9頭に達し飼養規模の拡大が目立っている。

地域別にみると、熊本県菊池台地、鹿児島鹿屋市周辺等の畑作台地、宮崎県霧島、尾鈴の各集約酪農地域、福岡県筑豊水田地帯などでの伸びが顕著である。

牛乳生産量も44年には382千トン、前年比118%と全国(112%)を上回る伸びを示しているが全国生産量の7.1%に過ぎず、搾乳牛1頭当り年間生乳生

産量をもみても、38年の4,200kgから44年には4,500kgと伸びてはいるが九州では梅雨期の多雨、夏期の高湿等気象条件が悪いため夏期の停滞がとくに目立ち全国平均5,500kgに比べ、なお低い段階にある。

一方44年の牛乳の用途別仕向けをみると、飲用牛乳向けは77%となっており、関東、関西地域にはおよばないが、全国平均の55%を上回り、その割合はわずかながら増加している。また生乳の需要面では、生産の伸びに対して飲用牛乳に対する需要はその割に伸びず低迷している。とくに九州では飲用牛乳の1人当りの消費量も全国平均の80%に過ぎない。

今後、九州の酪農が遠隔地帯としての不利を克服して、域外生産地に対抗するためには、飼料生産基盤の整備と経営規模の拡大によるコスト引下げが先決であるが、今後は水田の高度利用が問題になろう。また、高原地帯へ導入された乳牛についてはその運営も徐々に軌道に乗りつつあるが冬期の飼養管理などについてはまだ技術的に残された問題も多い。

肉 用 牛

肉用牛の飼養頭数は昭和38年以降子牛価格の下落労働力の流出のため減少したが、その後子牛価格の好転により再び増加の傾向を示し45年2月1日現在710千頭となり全国飼養頭数の約40%に達した。

特に中・南九州における頭数の増加は著しく、熊本、大分、宮崎、鹿児島等の4県で全国飼養頭数の33.3%を占めている。

しかし44年2月までの増加に比べその後の増加は鈍化の傾向が認められる。

なお、子牛生産の基礎とみられる2才以上の雌牛飼養頭数は全国の約31%を占め、九州は依然として全国的肉用牛生産地としての地位を堅持しているが44年の43%と比べると減少しており、その原因として九州地域における肉用牛肥育頭数の増加があげられる。

飼養規模においては、甘藷作の後退、米作転換等により多頭飼養農家の増加をみている。しかし、それは主として肥育経営においてみられ、繁殖育成経営における飼養規模拡大の速度は遅く、そのため飼養農家1戸当り飼養頭数は全国平均2頭に対してわ

ずかに多い2,3頭にすぎない。

これらの情勢に対応して、阿蘇、久住、飯田高原を含む九州脊梁山脈、霧島山麓、薩南諸島等において、草地および山林利用による肉用牛の大規模繁殖育成経営および養蚕、そ菜栽培等他作目との複合経営の確立が望まれており、それに伴う問題点の技術的行政的解決を急ぐことが強く要望されている。

なお、一部においては昨年に引続き、肉利用目的の一代雑種、特に乳用牛に外国肉用種を交雑した一代雑種の生産も小規模ながら計画的に行なわれるようになり、今後の成行が注目されている。

養 豚

豚の全国飼養頭数は43年、44年と豚肉価格の高値にもかかわらず減少していたが、45年2月には前年を17%上回る6335千頭に増加した。これは2カ年にわたって枝肉安定上位価格を15~18%上回る豚肉価格の騰貴を反映し子豚生産が増加したことによるものである。九州における飼養頭数は45年2月において前年対比で126% (938千頭)で全国にしめる割合は飼養頭数で14.8%、農家戸数で18.2% (8千戸)となっている。さらに、8月においては120% (1001千頭)となっている。また子とり用雌豚数は2月において127% (137千頭)8月では122% (135千頭)と東北についての伸びを示している。なお8月、子とり用雌豚が若干減少しているのは本年下半期における子豚価格が一時的に低落したこと、肉豚価格の弱含みなどから、子豚生産者に生産調整のムードが高まったためと思われる。

県別にみると熊本県は前年の70%、また、長崎県は30%増と大幅な増加を示している。豚の主産県としては、鹿児島、熊本、長崎、宮崎の各県があげられ、宮崎、鹿児島、長崎の各県は子豚生産県としての性格が強い。

飼養品種は繁殖用雌豚として、鹿児島県ではその約8割がパークシャー種であるが、その他の地域においては大半はランドレース種が占めるようになってきており、一部に中ヨークシャー種またはランドレース種を母親とし大型種を交配した一代雑種が飼われている。また肉豚としてはパークシャー種また

は中ヨークシャー種とランドレース種との一代雑種から次第にランドレース種、大ヨークシャー種、ハンプシャー種などの相互間の一代雑種が増加し、特にハンプシャー種を父親として利用する雑種生産が増加している。また一方では純粋種の改良が再認識され、種豚場の整備に各県ともかなりの努力を払うようになってきた。

衛生関係では、豚コレラの発生は僅少にとどまったが、流行性肺炎は依然として肉豚経営者に被害を与えている。

また最近、地価や労賃の安い南九州において商社による大型養豚経営の動きが活発にみられる。

(九州農業試験場)

養 鶏

九州は、福岡県を除き、かつて極めて零細な副業養鶏家の多い養鶏後進地と考えられていたが、最近では九州も著しい発達を遂げ、将来日本養鶏の一大生産基地となろうとしている。そこで採卵養鶏、ブロイラー養鶏の順序で、その概要を述べる。

45年2月1日現在の採卵用成鶏飼養羽数は、1665万7千羽であり、全国の総羽数1億1千8百万羽の約14%を占めている。その内訳を県別にみると、福岡561万羽、佐賀135万羽、長崎195万羽、熊本198万羽、大分164万羽、宮崎156万羽、鹿児島257万羽となっていて、福岡県は、全国都道府県中、第3位となっている。

採卵養鶏家の戸数は、29万1千戸で、全国の総戸数169万戸の約17%であって、これを県別にみると、福岡4万1千戸、佐賀2万5千戸、長崎1万7千戸、熊本3万7千戸、大分4万戸、宮崎4万1千戸、鹿児島8万8千戸となっている。

1戸当りの平均飼養羽数は、全国平均が70羽であるのに対して、九州は、57羽で、未だ小規模なものがかなり多い。その産卵率も、全国平均が62.6%であるのに対して、九州では福岡県を除き、他の県ではその平均を下廻る。しかしながら千羽以上の養鶏家が著しく増加しており、それらの飼養羽数のシェアは、77%であるから、大規模養鶏が主体となって来ていることがわかる。特に福岡県および宮崎・

鹿児島両県下において、大型養鶏、商社系企業養鶏等が発達しつつある。なお、九州の総生産卵個数は約25億5千万個である。

次にブロイラーの飼養羽数は、1千56万羽で、全国5千370万羽の約19%を占め、年間出荷羽数も全国2億6千万羽中、約5千万羽を占め、年間5千羽以上出荷する養鶏家はその主体をなしている。福岡県、宮崎県、鹿児島県下に特に発達している。

以上の他福岡県からは、年間約23万羽のひなが東南アジアへ輸出されている。九州は、養鶏生産に適する経済的諸条件を具備していると思われるので、今後その発展が大いに期待される。

(農林省熊本種畜牧場)

[飼料作物]

本年は早春の気温が低温に経過したため、水田裏作のイタリアンライグラスの伸びが悪く、収量は平年より少なかった。しかし収穫時期には天候に恵まれたので、サイレージ、乾草の調製は順調に進み良質のものが生産できた。

青刈トウモロコシ、ソルゴーなど春まき飼料作物の播種は適期に順調に行なわれた。しかし8月中旬の台風9号により、青刈用トウモロコシは利用時期であったため、葉の損傷、倒伏のため減収した。ま

た播種期の遅い青刈トウモロコシは7月下旬から8月中旬の乾燥により発芽不良となり、収量の低いものもみられた。

秋まきのイタリアンライグラス、カブは降雨に恵まれ、播種は順調に行なわれ、また秋は高温に経過したため生育も順調であった。

人工草地は早春の低温のため、牧草の生育がおくれ、このため放牧開始時期が例年より約2週間おくれた。また7月下旬から8月中旬の乾燥のため夏の牧草の生育も悪く、春の低温、夏の乾燥のため、牧草の年間収量は平年より減少した。しかし秋は高温に経過したため、牧草の生育期間が延長し、例年より遅くまで放牧できた。

本年特異的な現象は九州地域に広く、ネザサが春に開花、結実し枯死したことで、このため自然草地の放牧利用には支障をきたしたものとみられる。

飼料作物の作付面積は、畑専用牧草地は、43年に比べ44年度(9,151ha)は35%の伸びを示し、飼肥料作物も同様に12.5%増(44年度112,100ha)を示した。草地改良事業による人工草地造成面積は団体営による小規模のものは、昨年度とほぼ同じ面積が造成されたものとみられる。

(九州農業試験場)

